
ある バイト

今日源石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある バイト

【Zコード】

Z5545V

【作者名】

今日源石

【あらすじ】

暑い夏には、冷たい噂が流れる。

「あの事件 不幸ビルに行つた学生が帰つてこない」
そんな噂が流れていた七月某日。だんだん深刻化し青木参治の学校の生徒も夏休み前に急に減っている。夏休みに入った青木と友達の前に、「あの事件」が現実になる。

プロローグ

暗闇のこの部屋に明かりが漏れた。

「誰だ。名乗れ」

「執行部よ。雇い主さん」

女の声だ。

「入れ」

足音が響く。椅子に座る音。溜息。

「おやおや、お疲れかい?」

違う男の声。

「うるさいわね。命かかつてんのは、お前も一緒だ。うちらは、
お客様だ」

「そうですよ。先生。落ち着いて、落ち着いて」

違う男は先生のようだ。

少しの沈黙。声を上げたのは、雇い主だ。

「先生、お嬢ちゃん。あなたたちは、六組目です。前の組は、こ
とごとく失敗。惜しい人もいましたが、ミッション成功には程遠い。
われらも、そろそろ動かないと」

「あなた達の事は、知らないわよ」

「こら。静かに」

「さすが先生、では話をしよう。今から五日後には夏休みとやら
でしよう? そのときには、精銳陣をぐださい」

不敵な笑みを浮かべるのを感じる。

「それは、私がやるわよ。それより、あんた達に私たちをまかなか
えるのかが心配ね」

「そのことについては、心配なく。なぜなら、私たちは、人知を

超えています。あしからず」

息をのむ声が聞こえる。誰がやつたか分からない。

「部屋をでようか」

先生と女が席を立つ。ドアに向かう。

「先生、私この七日間欠課でいいです。その代わり口裏を合わせてね」

「まあ、安心しる。延期一日が無理なら延ばしてもいい」

「了解」

ドアを開く。

女の声が出る。

「明暗を分ける。死ぬ氣で行こう」

呟いたみたいだ。

雇い主の笑い声が静かに部屋に残る。

手に汗握るとはこのことか。発車したらもつ、とまらない。終着点までの道のり長し。

夏休みの始まり

七月某日。

「みなさん、やつと待ちに待つた夏休みですね・・・」

話の長い校長先生の話がようやく終わらうとしていた。外では、ザアザア雨が弱まりつつあった。生徒の数が少ない。立ちながら寝ていた青木^{あおき}参治^{さんじ}は、携帯のマナーモードの振動で起きた。正確には、そろそろ終わると直感して半分寝て半分起きている状態だった。そこにメールが来たのだった。誰だろう、と思いながら携帯に目を向けた。送信者、しろいサン。

「えっ、しろいサン? なんで」

口にしてしまった。慌てて周りに注意を向ける。大丈夫そうなのでメールを見た。

「校長先生またあの事言つてなあ どうゆつ?」

面倒くさいので「知りません!」と打って、返信した。

しろいという人物に送ったメールが5秒後に体育館に響いた。彼は、マナーモードをしないことが多く、今ひとつ後悔していると青木は思つた。

「じらー、白井」

怒られている白井は、「すいませえーん」と言つて、笑い誤魔化した。

「まあまあ先生、落ち着いて、白井鴉君^{じらいくからず}はわざとじゃないんだから。でも、白井君も気を付けないとね」

校長先生はゆっくり言った。ただ、白井という名字がこの学校に少し多いという理由だけで、いちいち下の名前まで言わなくともいいとみんな思つていた。

校長先生は、最後に

「まあ、あの事件^{じけん}のこと皆知つていてると思いますが、わが高校まで来ていらっしゃるので」

と言つて壇上を降りた。

もつとよくまとめられないのか、青木はそう思つた。

終業式が終わり、宿題を渡されそのまま下校した。

「ねえねえ、からちゃん。面白つかつたね。はははは」

「だからその言い方するな。俺は白井鴉だ。分かつたか！」

「ええ。なんですよ。いいじゃない、フミには良いつていったじゃん」

白井は、そろそろ堪忍袋が切れるところだった。青木が、

「まあまあ、二ノマエさん、白井さん」

「なによ。あんただつて二ノマエせんつて、他人行儀みたいに言いやがつて。わたしは、一一三番いのまえふみかだ。白口紹介の時にフミと呼んでつていつたじゃんバカー」

暑い日だった、特に蒸し暑かつたので、すぐ収まった。そして、ショウもない応酬に飽きてきた頃、あの事件についての話題が上がつた。

「そう言えば、あの事件、はさ、んん?なんだつけ。」

「バカねえ。からちゃん。それは、人が謎のビ」

「その話はするな。うんざりなんだ。」

急に話しかけられて、三人とも、戸惑つた。そりやそりだ。真面目にこんなにも大きな声で、話されたら驚くに決まつて。一段落ついたところで、声のほうへ体を向けると、

「え? だれ?」

「しろいサン、何言つてるんですか! この人は、河野さんですよ」

「あー。なるほどね。フミ知つてるよ。この人生徒会副会長だ。そ

うだよね? こうみッチ。うん、絶対そうだ」

「はいはい。分かった分かった。合つてるよ。二ノマエ じゃなくつてフ・・フミさん。」

河野は戸惑いながら、相槌した。

「僕も思い出した。この人は、河野光弥こうのこうやさんだ。しろいサン。今日

終業式の同会していた人ですよ」

「へえ。じゃあ、この人が早めたりもつと早く終わつたのに。今頃寝てゐるのにな」

「白井さん、ですか。あなたが、怒られなかつたらもつと早く終わつたと思ひますが」

少しの間、皆から笑い顔が見えた。

「そつだよね。こうみツチ。」一三番が、青木たちのほうを向いて、「お前ら、しつかりフミつていえよ。こうみツチは、しつかり言つてるぞ。特に、参治。まあ、からぢやんは、いいや」

青木は氣付いた。一三番は、自分を高めたいのか。自分といつものにこだわり過ぎていると。白井は氣付いた。一三番は、青垣にはまだ名をつけないことを。河野は疑問に思つた。この三人は、なんでこんなに仲がいいのか。どうして笑いあえるのかと。少量の雨がそれぞれの傘にあたる音が妙に響く。

一一三番が口を開く。

「じつみツチの友達一号は、この一一三番である。だよね?」

「まあ、はい。それより、あの事件、のことは口外禁止ー以上

青木が、終わりそうな雰囲気に口をはさむ。

「まあ、それは分かりましたが、会長さんは何処におられるのですか。資料の提出をしないといけないのですが」

「会長は、今日は欠席です。それは私から渡します。全く、あの人は司会したくないからって」

「ありがとうござります。では」

青木が言つ。

「ばいばい。じつみツチ」

あの事件

河野と別れてから、雨は止んでいた。

白井が難しい顔をしていた。一三番が気付いて顔をのぞく。

「ねえねえ、からちゃん。どうした」

「いや、参治が渡した物は何だろ?と思つて」

「ああ、それはですね」

青木が言おうとして戸惑つ。頷きをしてOKの意味を示してから、「あの事件」のことです。ほら、僕つて一応、陸上部兼新聞部ですから。まあ、そう言つても陸上部は僕一人ですし、新聞部は顧問がないので幽霊部ですよ」

意外と驚かれて青木が驚いた。開いた口がふさがらない、とはよく言つたもんだ、と思う。

「でも、新聞部のほうは、生徒会が校長先生と連携して運営してくれて僕が情報収集役です」「初耳だな。参治」

「僕は、しろいサンと違つてサッカー部兼バスケ部兼バレー部という事は出来ません。あなたは、運動神経を買われてこの学校來たんじゃないですか?」

「違うよ、参治。からちゃんは、勉強部も入つているよ。まあ、実質的には補習よね」

「そうですね。それで、殆ど部活出てないですもんね」

「おい。お前ら、殴るぞ。参治は頭が良いからつて。フミも少し運動ができるからつて」

白井の顔が赤かった。まるで、獣だ。このまま、放つておくとやばいから話題を切り替えようとした一人だったが、焦つているほど思考が回らないものだと感じた。

「まあまあ、しろいサン。運動神経いいなら自慢できるじゃないですか。中学の時の全国大会のこと、覚えてますか。サッカーする

が、バレーするか迷つて結局交代するタイミングを調整して一つとも出た、っていう話です」

「へえ、からちゃんにそんな武勇伝あるなんて。中学も同じがよかつたな」

「覚えているよ。死にそしだつたんだから」

「では、話を戻しますがいいですか」

すっかり白井の話で全く聞く耳を持つていなかつた。少ししてから、青木が河野のことを思い出した。よくあのタイミングで、話題を自分に向けるものだと。

「はい！ 静かにしてもらえますか！ 話を聞くのはあなた達だけだ！」

大きな声が響く。

「わつ、分かつたよ。落ち着け、怒るなあ。参治、俺らも悪かつたつて

必死に白井と二三香が止めに入る。

ぬるい風が吹いた。

青木から、殺気が消える。

一段落つき、三人で歩道を歩いていた。熱風が、頬を触る。

「すいません」

「大丈夫だ。俺らが悪かつたからな。それよりも、おれは、あの事件、を知りてえ」

「私も、謎のビルに人がいくくらいしか知らないし」

青木は、二人の顔を覗く。

「うん。あるチラシを配られたひどが、なぜか、三丁目ビルに行つて帰つてこない。偶然に行方不明だつた生徒が、三丁目ビルの前で見つかるが、記憶がチラシをもらつた時までしかない。そして、これが面白いんですが、ビルに行くのは学生だけです。ある学校の生徒がいつきに減るつていうニュースを聞いたことがあるでしょ。現に僕らの学校の生徒も減つています。だから、三丁目ビルは、不幸ビルと呼ばれている。もともと、あの場所には、建つ予定がなかつ

たらしいし。土地神を怒らした、つていう噂までたっています。あの事件、の総称を‘不幸ビル行方不明事件’、という事になってしまいます。ただ不可解なことは、行つた学生皆が必ず帰つてきます。そして、これは、あまり公にすることにはうつしの校長が伏せると。五日前、情報収集をしていて、電話で報告したら、そつと言つていました。

あと、チラシが見つからないんです。どうこう経緯でビルに行くのか、分からんんです。内容さえ分かれば新聞に書けます。

これが、僕の調べたことです」

熱風を感じない。緊迫した状況。怖いぐらいだ。青木が笑つている。

白井が、逃げるような視線を泳がせた。そして、

「あつ、家に着いたぞ」

「じゃあ、私はこれで。一人とも五階だよね。私は、今日塾があるの」

「おひ。じゃあな」

一三番は、一階に向かつて走つた。

「青木、白井、フミは、同じマンションに住んでいるのか。じゃあ、次は、あんたたちにしよう。

ええつと、あと一田か。延ばしたら先生の言い訳が、口下手で、意味不明になるな。特に生徒に聞かれたらヤバイ。そうしたら、うちまで、疑われる。明日の朝この人たちに・・・」

夏風が冷たく吹く。

青木と白井は五階に向かつて階段にいた。

青木は、502号室。白井は、501号室。

今日は、そのまま寝ることにした白井。今日のうちに新聞の記事を少しまとめよつとする青木。夏休み初日は、なんとなく終わつていいく。

不幸ビルへの誘い

朝、五時。青木はいつもと同じ時間に起きる。体を温めるためのジョギングをするためだ。そして、青木は準備を済ましてから、水を一杯飲んだ。

「さて、しろいサンを起こしに行ひ」

これも日課になっていた。

青木が、501号室へ向かつ。インター ホンを押す。一分後に

白井は姿を現した。

「早かつたですね。しろいサン」

「昨日早く寝たせいで、今日はすつきり」

「では向かいましょか」

五時五分。日差しがまだ弱いのが、目で確認できた。

青木が早足で階段へ向かう。それを追うようにして白井が後から走つていく。

ジョギングの道のりはいつも同じだった。裏口から隣町の駅までの一直線、その次に学校に向かつて走り、家まで戻つていく、というルートだった。

五時三十五分。いつもより少し早いペースにしたからか、白井が起きるのが早かつたからか、その理由は考えても無駄だと思った。昨日見た帰り道。違うのは一三香がないことだった。それにもう一つは、その一三香が苦い顔をして、帰つてくる一人の前にいたことだつた。

一三香が怖い顔をして話しかける。

「ねえ、二人ともこんなにも朝早く走つているの？」
視線が明らかに他のほうに向いていることが分かつた。

一三香の手には、くしゃくしゃの紙が強く握られていた。

青木が口を開けた。

「フミさん。何か隠し事をしているでしょ？僕らもなぜあなたが

朝早く起きているのかが分かりません」

「朝早く起きたのは、夏休み始まつたから無駄にしたくないなあ、
と思ったの。それだけで早起きした。しかも四時四十七分にね。何
か悪い?」

白井が身を乗り出したよつて、話を聞いている。一三香は、ただ
不機嫌にしか見えない。話を続ける。

「少し待つてベランダのほうにいたら、あなた達が走っていた。そ
れで、一人みたいに走つてみようかな、と思ったの。あなた達の事
はよく耳にするから。それでも本当だつたとはね。そしたら郵便受
けにこれが入つていたの。ついでを言つと一人とも入つていたわよ。
見てなかつたの?」

青木が笑つて話す。

「それはですね、いつもルートで行くと裏口から出るので見ないん
ですよ。そんな朝早く郵便も届かないし」

一三香が、そうだよな、といった顔をして少し安心した顔をする。
白井が口を挿む。

「でも俺らがそれを昨日見ていない。といつことは、朝早く誰かが
入れたものに違ひない。うん」

白慢げに推理したように見せた。

青木が少し笑つて息を深く吸い込む。

「フミさん。その紙見せてください」

一三香は、戸惑うことなくスッと手を出した。

そこには、じづ記されていた。

急募

MKSからの招待状 for 一三香様
三丁目のビルへ来てください

五日 ある、バイトをして欲しいです 内容は秘密です
お金は一括で払います 仕事ぶりにもよりますが、平均は大体、

百万円程度です

必ず保証します

男女問わず

ただしこの事は口外禁止

支配人 幸治 こうじ じん 刃

P・S・興味がありましたらお電話ください
詳しい説明をします

この内容を読んで最初の感想はなかなか親近感の湧く内容ではない。文体は柔らかい。

電話番号に関しては、小さく下のほうに書いてあった。

青木、白井の顔に緊張が走る。もっとも、一人の見解は違った。
青木は、記事がまとめられると思ったから。白井は、自分にも来て
いることを思い出したから。

青木が口を開こうとした時に、二三秒が口を挿む形となつて一瞬静
けさが戻る。

先に話したのは二三秒だった。話すというよりも尋ねるようだ。

「これどう思う?」

今から言おうとしたことを質問され、青木は戸惑つた。そこに白
井が口を入れる。

「百万だって、一百万。すごいなあ、俺も貰えるつてことだよな。
やつたー」

青木が白井の会話を制して話す。

「この広告は間違いなく不幸ビルについて書かれています。平均百
万貰えるってことは、それ以上稼げるかも、と思い応募する人。怪
しいので電話をかけてしまう人。そして絶対帰つてこれるから行く

人。そんな人たちが不幸ビルの被害者だつたというわけだ。それにこの最も厄介なところは、本人たちは自分の意志で行つてているので、何も止める口実がない

「三香が頷きながら言葉を返す。

「そうなのよね。まず話が抽象的すぎて行こうとしたら電話しないといけない。そこでまんまとはまつてしまつ。また、不幸ビルの噂も立つてゐるけれどどうして行きたがるのかが、分かつた気がするわ」

白井が話から離されそうになる。慌てて口を挿む。

「それでさ、行くの？ 行かないの？ 結構お得だと思わないのか。お前ら」

「しおいサン。それだと僕たちもあのビルに行つて出れなくなるし、出てこれても意識もない状態になりますよ。それが嫌なら行く必要はないです。まったく、あなたみたいな人がこの罠に引っかかるんですね」

「わ、悪かったな」

慌てて言葉を返す。

日が昇つてきて温かくなつて来るはずが全く別の環境を作つてしまつた。この幸治刀つて奴を懲らしめたいと三人の共通の思いになつた。

青木が提案する。

「しろいサン、フミさん。どうしますか？」
「一人とも少し考えたい、といつ事だった。

午前中は三人まとまって、夏休みの宿題をすることにした。場所は白井の部屋という事になつた。

「二人とも入るのは初めてだよね？」

白井の問いに青木が、

「確かに隣だつたからか気にしたことがなかつたですね」
続いて三香が、

「フミ、男の子の家に入るのは初めて」と言つて軽く興奮していた。

朝の起きたことのせいか、宿題のペースも遅かつた。青木にとつてはこの宿題に関しては、三十分もあれば一日分のノルマの三分の一もからない。しかし、今日は同じ時間を過ぎてもノルマの七分の一程度だつた。白井に関しては、青木に解き方を教わりそのあと答えを教えてもらつていた。青木としては答えを知つているほうが教えやすい、という事だそうだ。二三番に関しては、うるさく話しかけていて宿題には手を付けてもいいなかつた。後で青木に教えてもらつつもりだ。

一時間半も経つてしまつたら、この宿題は気を紛らわすにはあまり効果を示さなかつた。それどころか宿題をする雰囲気ではなかつた。青木が頑張つて二人に宿題をしろと言つても手をつけなかつた。結局青木も一日分にノルマを終わつてからは一人と混ざつて遊んでいた。そのまま、買い物をしようという事にまでなつた。

各自家に帰つて 部屋に戻つて 昼ご飯を食べてから行くことにした。

青木は、自分の家で三日分のノルマの宿題を終わらせた。そうしていると、あつといふ間に約束の時間が来た。集合場所である、一階の二三番の家の前に早めに行つた。

買い物に行くからか、白井はお気に入りのジーンズをはいていた。二三番は、普通に何処にでもいそうな女の子という感じだつた。

買い物に行くとは言つたものの、結局コンビニに行くことになつた。二三番は、実用品やらを買い込んでいた。白井は適当に涼んで、本を読んでいた。青木は、メロンパンとジュースを買つた。白井が、「またそれか。好きだなあ」

いつも買つているからか、青木の好物がメロンパンだと白井、二三番にばれていた。

それから、青木、白井も忘れていた、チラシを取つて再び白井の家に行く。

このチラシの事実を確認するために。

チラシに書かれていることは、名前以外丸々一緒にだつた。あとは、貰える金額も少しばかり変わつていた。百万円のところは、二百万円になつていた。男はやはり働くからなのか。そんな疑問を持ちつつ、白井の家の前に着いた。

部屋に入るや否や白井はゆつくりソファに寝転んだ。緊張感のない顔で、ジユースをコップに入れた。その時にのみ、起き上がりまた寝こころんだ。

「三番は、緊張していつ、電話のことを言おつか迷つていた。白井がテレビの電源を入れた。テレビでは、最近起つた議員のヘリ機の事故を取り扱つていた。

まあ、この場合仕方ないですよ。ヘリ機の事故は生存確率一割以下ですから。落ちなかつたら強いですが解説者が言つことに少し反応したように青木が苛立ちを露わにして言つた。

「このやうひ、生存確率のせいでいやがつてむかつく」

「三番が顔を覗きこむように話す。

「で、でもさ参治。やつぱり死は怖いからよ。言つてることは正しいわ。それに生存確率一と十は違う」

「そういえば、このヘリ機の事故のおかげで、俺らのビルの件伏されているらしい」

白井が一人の話に気づき口を挿む。

「いろいろサン。そんな話してゐ時じゃないですよ

「「めん」「めん」」

早まる鼓動が聞こえそつになるまで、白井の部屋は落ち着いていた。

急に青木が、

「電話かけませんか。この詳しきは、電話してくれつて書いてあ

るし

もう、そうするしかないと白井、一三三番は思った。

電話番号を一三三番が押して、青木に預けた。青木は指が震えて、押せなかつた。度胸あるなと白井は思い出させられた。

やると決めたらやるしかない。そう反復し続け青木は受話器を耳に当てる。

プルルル、プルルル。ベルが一回なる。

もう一度鳴つた。苛立ちを足踏みで止める。そうしたら、プチッ、と音がした。切られたのか、そう思い少し安心した。

すると、またプルルル、プルルル。音が鳴つた。青木の顔に緊張が走る。そのせいで、白井、一三三番にも緊張が走る。

力チ。

そうして、ゆっくりとした息を受話器からはつきり聞いた。

それに応じて青木がスピーカーホンにする。

「お電話ありがとうございます。こちら、MKSです。このたび我々の招待に対し、お電話していただいてうれしい限りです。あなたのお名前を伺つてもよろしいでしょうか」

その男の声がそこでいつたん話が止まる。話せという事だらう。

「僕は、青木参治。他には、白井鶴、一三三番だ。以上」

「ありがとうございます。こちらの方とも一致しているので、参加を認めます。いかがなさいますか」

また静かになつた。白井が大きな声で怒鳴りつけた。

「おい。何なんだよ、お前ら。参加しなくていいのか、ならしない。人がいなくなるんだぞ。帰つてくるけど。白井鶴は参加しないぞ」

「フミはどうしようかな。ねえ、そこに参加すれば、帰つてこない人を帰すことができるのかしら」

相手側の声が聞こえた。

「それは、あなた達次第です」

「ならフミは参加します。——番は参加します」

それを聞いた白井が困ったように言った。

「フミ、それだとお前帰つてこれなくなるぞ」

「でも帰つてこれるんでしょ？」

相手側が口を挿む。

「もちろん、それを保証します。体までは

静かになる。夏の暑さが部屋に少し留まつた。

「参治、どうすんの？俺はお前も行くなら俺も行くよ」

「なら、決定だ。全員参加だ」

青木がはつきり声を出す。

「ありがとうございます。では、今夜の十一時に田のビルに来てください」

ピッ。ツーツー。

青木は受話器をあらすのにかなり時間がかかった。三人とも心音がやむどけるか早くなるのを感じた。

不幸ビル。もう田の前まで近づいている。背中を無理やり押された感じがしたが、あとは踏み出すしかないと思つた。

不幸ビルに

夜まで、待つことにするがその間の緊張が彼らの雰囲気を作っていた。その形がぐつたりするというよりそわそわしている、が相応しい。

青木は、どこかに行く準備をしていた。白井は漫画を読んでいたが、ところどころに緊張の色をにじみだして、トイレに行ったり、筋トレをしていた。一三番は、部屋の間を行ったり来たりを繰り返していた。

不意に、青木が大きな声で言い放った。

「寝ましょう。一人とも。夜に集合なら、くらくらしてまともにアルバイト出来ないなら、招待状貰つておいて申し訳ないようになりと」

白井が一秒ほど経つてか、首肯しながら声を出した。

「そういふぜ」

一三番は、何も言わず頷いているだけだった。

三人とも眠りについた。現実から逃げるに相応しいものは睡眠だと三人ともに共通の思いだつた。

ただ青木は、寝ている心地はしなかつた。今日という日に何かあつたのかを、忘れられないとしみじみ感じた。

白井は、わくわくしている体を振舞つていたからか、本人でもわからないほど、ゆっくり寝た。

一三番は、長いような短いような眠りで、ただ安心して寝た。人が守ってくれると思って。

青木、白井、一三番は、大体八時まで寝ていた。

青木が飛び上がるよつに起きて、驚くよつな声を出した。

「もう八時ですか？」

「そうだね」

一三香が、頷いている。

白井が体を起こして、腕を大きく回した。そして、

「よし、準備運動終わり」

そのあとに、特に会話は続かなかつた。眠りたいせいもあつた。

午後九時二十分頃、適当に空いている店に入つて、晩ご飯を買って、家に帰つて食べた。青木はメロンパン、白井は惣菜弁当、一三香は栄養ドリンクだけを買つた。

そして、三丁目に建つビル　　通称、不幸ビル　　に向かつての準備を済ました。

三人は出発した。自分たちで出した答えを相手がどう返すかに少しの期待と、これから起ることに対する恐怖と、きっと不幸ビルの正体を暴き、生きて帰つて来ること且つ記憶も持つて帰つて来る決意を胸に歩き出した。

到着した時、不幸ビルは大きな風に吹かれていた。

アルバイト

三人とも不幸ビルの入り口に立っていた。手に持ったチラシを「チラシを入れてください」の箱に入れて「少しお待ちください」の表示のドアが開くのを待つた。

急に女声がした。

了解しました

その瞬間にドアが開く。三人とも中に足を踏み入れる。緊張よりもビルの中に入った時の新鮮感の方が強かつた。中は、意外と豪華な飾りつけをしているのに、所々マントルピースや暖炉があるなど異種な雰囲気を醸し出していた。後、気になつたのは配色が合わないことだった。

青木は、ただこの景色に目を向けていて氣味悪いとしか思わなかつた。白井、二三香は新鮮味を持つて一種の美術館だと感じた。大きなロビーのような場所に出た。天井が意外に高くてずっと上を見上げていた青木が首を倒して溜息をつきながら睡棄するように言つた。

「これは、ビルなのにホテルみたいにしている感じだな」

そこに二三香が怒った感じで口を挿む。

「ええ? どつちかつていうとホテルよりもお金持ちの家が何かだよ。説明しにくいけど」

「だとしたら趣味悪いねえ」

白井も会話に入つてくる。ただ、この状況を打破する為に音量よりも音質を変えていた。
その時、照明が一気に消えて耳にキーンという高音が鳴り入つてきた部屋の扉が閉まる。

その出来事から三秒後に明かりが急に点いた。目が明るさに慣れたら今ある状況に三人とも驚愕した。男が目の前にいた。背は高くてそれだけで誰でも威圧するような感じだった。黒い色で整えられ

た服装がより彼に陰鬱さを与えた。

「よくお越しくださいました。お待ちしておりました。青木参治様、白井鴉様、一二三香様ですね。これで合計四人ですね」男が黙つて小さく頷いた。三人とも改めて自分の名前を言われて妙に緊張した。また男が続けた。

「皆さんには、このバイトをするという事でいいですね？」

三人とも動搖しつつも首肯するような雰囲気に呑まれていた。

「申し遅れましたが、私はこの未完星のある一派の支配人、いや雇い主とでも言いましょうか。氏名は幸治^{じゅうじ}、名前は刃^{じん}と言つものです。皆様には今から少しお話を聞いてもらいます」

そのことについて三人とも疑問を持ったが、面接なのだと思つて聴こうとした。

「皆様は『聖書』をご存じだと思いますが、我々未完星ではその聖書を調べてみようという運動が百年前から始まり今に至り聖書の殆どの部分が科学的に立証されるようになりました。つまり、聖書は実際に起こったことなのです。それは、地球での科学力ではまだ到達しない部分です。そのことを踏まえて話をします。尚、この事は口外禁止です」

地球では到達しない部分、といふものに白井は対抗心を持ち大声で怒鳴つた。

「おい、という事はお前が話すことはどういうことになる？」

「ただ、信じて下さい」

即答だった。その顔には、怒りがこもつていると一二三香は感じた。まだ少し眠気が残つている青木にとっては現在の状況は耐えることが出来なかつた。起きようとして集中していた。その青木もその幸治の怒りは伝わり目を覚ました。

幸治が一つ息をついて話し始めた。

「先ほど申し上げたように、聖書は実際に起こった事柄を書きだしたものです。その中でも我々は『創世記』に注目しました。エデンの園で一人の男女が禁断の実を食べてしまったつまり墮落で

すね。そのことに研究内容の焦点を当てていました。それで、そのことは色々な見解がありますが我々は墮落行為の記述は比喩であると発見しました。比喩内容はこうです。男女とは、神が創造したものがつまり本当の男女です。その中で、男は世界にある神の創造物に名前を付ける、という内容があります。それは、何を比喩しているかというと自然全体を人間が支配していた、要は自然の能力を持つていたということになります。だが、墮落したことによってその自然を支配する つまり自然の能力が使えなくなつたということです。

我々は、秀でた科学力によつて墮落前の自然の能力を使える状態にまで体を持つていかせることに成功しました。それはこれを着けていただくと良いのです」

そう言つて幸治は赤いリストバンドを見せた。そして、それを二人に渡した。三人はそれを幸治がつけているように左手首に着けた。幸治が困った顔をして一言付け加えた。

「あ、別に左だけなくともいいので」

そのように言われたが、三人ともそれを変更することは無かつた。そして、幸治は話を続けた。

「皆様には、個性がありますよね。熱血とか、気が短いとか、人見知りといった種類です。皆様は、まだ墮落前の完全な人間ではないので皆様の持つている個性が能力として現れます。今はまだ慣れていませんので簡単に扱えませんが、すぐに慣れるので心配ならないで下さい」

ただ、ここまでの中には驚かざるを得なかつた三人だが時間が経つにつれてある疑問が生まれた。

青木が、拳手して注目を集めてから話した。

「それは良いんですが、結局アルバイトとどう関係があるのでしょですか？」

幸治が、待つていたかのように頷いで笑みを浮かべ話し始めた。

「はい。そのことです、またお話をする必要がございます。

我々は、発達しすぎた科学力に比例して負の遺産も生み出してしまいました。例えば、必要のない力を持った生物、色々な有毒物質などがそれです。また、今現在我々が主張している『科学力抑制派』と『科学力拡大派』の対立なども問題です。科学力拡大派は、負の遺産を上手に利用して戦争をしかけています。我々も、応戦しますが人手が足りません。なので、あなた達を呼びました。あなた達の純粹な地球の血統が必要なのです。

このような話の内容からもうお分かりでしょうが、科学力拡大派と科学力抑制派として戦つてほしいのです。我々はこれを『危険因子狩り』という風に呼びます

三人とも息を飲み込んだ。何かしないとダメだという心に対しても、全くと言つて体が動かず金縛りにあつてゐるようだつた。要は、戦争に参加してくれと言つてくれ、と言つてゐると同義だつたからである。

幸治がゆっくり拍手した。三人の注目が幸治に向く。

「それでは、報酬の説明をします」

その瞬間、白井の体が弾かれるように「おっ」と声を出した。それに、続くよに二三番も注目した。青木は、落ち着いたようにしていた。

幸治が確認したところで話し始めた。

「報酬のルールとしては、倒した危険因子をポイント制にしてその合計ポイントをお金に換算してお支払いします。一ポイント千円とします。尚、お一人様百ポイントは取つていただきます。そうでないと、能力不足でそちらの言葉で言つクビにしますのであしからず。そして、一回のアルバイトにつき拘束時間は五時間です。また、最大で五日のみの拘束です。リストバンドが唯一の我々とのつなぎですので」

話し終わると青木が笑いを堪えるように言つた。

「何だか、小説や漫画みたいだな」

白井が口を挿む。

「いや、SFとかファンタジーだよな

一三香が白井に同意するように

「そうね。私は、ファンタジーっぽいけどね

と纏めた。

幸治がまた拍手をした。そして、ゆっくりと言つた。

「皆様が、このファンタジーの現実を受け入れて何より誠実にアルバイトしてくれるよう願います。また重ね重ね申し上げますが、この事は口外禁止です。それでは今から、第一回目の危険因子狩りに行つてもらいます」

そのように言つた瞬間、三人は光に包まれてその場から消えていた。

第一回危険因子狩り

三人とも、光に包まれた後あまりの目の痛さにより宙に浮いている感覚と移動している雰囲気を覚えた。

その移動が終わった後、最初に目を開けたのは白井であった。そして、白井が叫んだ。

「おい、すごいぞ！ 目を開けて見てみろよ」

そのように言われた青木と二三香が慣れてきた目を開けた。そこに広がっていたのはただの殺風景だった。黒か灰色か分からぬ雲に覆われて、光はうつすらとしかない。地面は、生存競争に敗れたと思われる動植物が転がっていた。よく見ると人型の死体もあった。怖くなつた三人は色々な方向を見た。

不意に二三香が左手で指差して声を出した。

「あの場所つて、まさか都市部？ ここはゴミ捨て場所みたいなところ？」

青木が確信を持った顔で話した。

「多分だけど、都市部の成長の為において行かれた 　幸治の言ったのは別の負の遺産 　だと思つんだ」

白井と二三香もそれに同意するように首を縦に振つた。次に白井が拳手していくた。

「あの、こっちの森に行って早く百点取らうぜ。それにこの能力つてものにも慣れたいし…」

二三香が笑いながら話した。

「小学生みたいね。はははは」

青木が相槌を打つて同意した。

「そうですよね。急ぎましょう」

三人は森の方向へ足を運んだ。森の中は、より光が届きにくくなつていた。そのせいなのか足元にある木の根に何回も躓いた。

その時、二三香が「あっ」と声を出した。

白井が尋ねた。

「何だよ。何かあつたのかよ」

「私達って、能力使えるんだよね?なら、使ってみようよ。どうするのかな?」

そのように言つて一三香は「ウーン」と唸つて数秒経つた。その時、一三香の体が発火した。その炎は一三香を燃やすというより包んでいるようだった。

「きやあ、燃えている。でも、そんな熱くはないね」

一三香の科白に白井が反論した。

「いやいや、十分熱いから」

「多分、この炎がフミさんの能力でしょうね。その人の性格が能力に出るつて幸さん言つていましたしね」

そのように青木が説明した。その後、一三香が言つた。

「私は、燃えているつて事は熱い性格だよね」

「そうですね」

青木が同意した。

今度は白井が唸つた。そのようにしてもあまり変化が見えなかつた。

「どうしたら良いんだ?」

白井の疑問に一三香が答えた。

「それは、全身に力を入れるようにするんだよ」

そのように言われた白井はさらに力んだ。だが、体の表面上に変化が出なかつた。がつかりして木に背もたれた。白井は起き上がりうと木の幹を押さえつけた。その時、白井は木の幹を折つてしまつた。

一三香が驚いた。

「すごい力だね」

「本当にすごい力だな。火事場の馬鹿力だな」

白井が意気揚揚に言つたが青木が口を挿んだ。

「でも、火事では無いんですけどね。あつ、でもフミさんが燃えてい

るのか」

そのように言つた後、三人とも大きな声で笑つた。その笑い声に感応したかのようになに大きな猪が群れになつて走ってきた。その猪の大きな体つきから所々湯気みたいなものが出ていた。三人は発達した科学力の負の遺産を感じ取つた。

「猪は群れで行動するのかな？」

そのように一三香が言つた。白井が素早く言い返した。

「そんなの関係ないってば。早く倒そうぜ」

猪が群れになつて三人を囮んだ。三人も猪に合わせて背中同士を合わせた。一三香は炎を出して、白井は力を体に入れた。青木もこの時初めて体に力を入れて能力を発動させた。そうさせたら、青木の体からは黒いオーラが噴き出た。

白井と一三香が口を合わせて青木に言つた。

「参治みたいに恐ろしい感じだ」

この時青木は、自分という存在は相手に恐ろしさを醸し出していたのを初めて認識した。そして、このように言つた。

「まるで、妖怪、ですね。僕の能力は妖力ですか」

そう言つた瞬間から、白井が青木と一三香に声をかけて闇を上げた。

「よつしゃ、やつてやろうぜ」

三人は互いに猪を攻撃していた。青木は黒いオーラを猪にぶつけていた。白井は、接近して攻撃していた。一三香は、炎を体の周りに放出して猪をあまり近付けないようにして、近づいたら攻撃するようにしていた。

三十分ほど経過した。戦いが終わった森の中心はきれいに広場になっていた。三人ともあまりのエネルギーを消費してはいなかつた。日頃の訓練の賜物という事を改めて感じた。

三人は歩みを森の奥へと進めた。一旦壊した場所を離れることは嫌なことだと感じながらもリストバンドに示されている数字がポイン

トを示しているのだと気付いてから、早めにポイント稼いで余裕を持つておこうと言う事がすでに暗黙の了解になっていた。そのせいで会話し出すことが難しくなり途中に、沢山の動物の死体が集まつているのを発見した時に一三香が「気持ち悪い」と言って以来会話が一気に減つてしまつた。猪が出てきてからは、あまり大きな群れの危険因子は出でこなくなつていた。

少しずつ出てくるのがイライラしてきた白井は大きな声で叫んだ。

「雑魚ばかりじゃねえか、チクショウ」

青木がそれを宥めるように耳元で囁いた。

「五月蠅くしてまた群れで出てきたらどうするんですか？」

「知るかよ」

白井はそのように怒つたが、青木もそれに合わせて怒りに満ちた顔を白井に向けて白井を黙らせた。

そのように少しずつ会話が増えてきた時に三人は森を抜けていた。森を抜けた時点での残り時間は一時間五分、青木の獲得ポイントは二百五十七、白井の獲得ポイントは一百九十、一三香の獲得ポイントは一百三十三であった。

少し歩いたところに人が立つていた。その人が三人の方を向いて話した。

「あんたら、幸さんの所のもんか？だつたら敵だな。俺は、『科学力拡大派』の人間なんだ。俺が放つておいた猪はお前らが倒したのか？それはすごいな」

青木の意識には、この目の前にいる男は負の遺産を利用してこの戦争に利用しているというものが浮かんだ。白井は敵だと言われて、ただ今すぐ戦いたいと思った。一三香は男のつけていリストバンドを見つけて、どんな能力なのかを知りたくなつた。

男が笛を吹いた。その瞬間に沢山の大蛇が男の後ろに現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5545v/>

ある バイト

2011年12月31日16時01分発行